

ミケランジェロと理想の身体

国立西洋美術館（東京・上野公園）2018.06.19～09.24

「ミケランジェロ・ブオナローティ」（1475～1567）は、彫刻、絵画、建築の各分野で名をなし“神のごとき”と称されたイタリア・ルネサンスの芸術家で、数多くの作品の中で特に注目したいのは、巨匠の神髄である「彫刻」である。

本展は、「ミケランジェロ」をはじめ、ルネサンスと古代ギリシャ・ローマの大理石およびブロンズ彫刻、壁画、油彩、素描、陶器など、本邦初公開を含む芸術作品「約50点」が終結し、様々な切り口から男性美の表現を捉えるとともに、巨匠に影響を与えた古代作品に彼から影響を受けたルネサンスの作品を紹介して、古代とルネサンス期における理想の身体美に迫るという企画である。

《ダヴィデ＝アポロ》大理石 高さ145.5cm 1530年頃 謎の傑作、日本初公開



「ミケランジェロ」芸術の神髄とされるこの彫刻作品は、モチーフが聖書の英雄「ダヴィデ」か、ギリシャの神「アポロ」の何れか解釈が分かれる。

身体の重心を片側にかけた体制の「コントラポスト」は、古代ギリシャ彫刻の古典的なポーズであるが、重心と動きを対角線上に表現する古代の規範とは逆に、重心を置く足、動きのある腕はどちらも左側で、大きく振り上げた左腕によって上半身がねじれ、前に右足を突き出して身体全体で螺旋を描いている。

また、頭から足元にかけての緩やかなS字カーブのような造形にしなやかな美しさがあり、右足下の丸い石は、始めはゴリアテの斬首された頭部にするつもりだったようである。

大理石像の表面には無数のノミ跡が残されているのは、巨匠の彫刻技法の秘密を物語るとされ、ミケランジェロの語録には、**どんな石の塊も内部に彫像を秘めている。それを発見するのが彫刻家の仕事だ**との名言が残されている。

この作品には「3つの謎」があるとされている。

「謎1」は、ダヴィデか？ アポロか？。

「謎2」は、古代の伝統か？ 革新か？。

「謎3」は、仕上げをしないまま旅立ったため、未完か？完成か？である。

フィレンツェ・アカデミア美術館所蔵のこの大理石彫刻の名作品は、至宝とみなされているためこれまで日本で公開は不可能であったため初来日である。